

国土審議会 計画推進部会第11回住み続けられる国土専門委員会

平成30年9月25日

【水谷課長補佐】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから国土審議会計画推進部会住み続けられる国土専門委員会第11回の会議を開催させていただきます。

私、事務局を務めさせていただいております国土政策局総合計画課の水谷でございます。本日はお忙しい中ご出席いただきまして、まことにありがとうございます。事務の関係で冒頭お伝えすることがございますので、しばらく私のほうで司会を務めさせていただきます。

カメラ撮りが必要な方々におかれましては、この時間をお願いいたします。

会議の冒頭につき、本日の会議の公開につきまして申し述べさせていただきます。本会議は公開することとされておりまして、本日の会議も一般の方々に傍聴いただいております。この点につきまして、あらかじめご了承くださいますようよろしくお願いいたします。

また、本日、事前に広井委員、高橋委員よりご欠席のご連絡をいただいております。住み続けられる国土専門委員会設置要領の4に定められておりますとおり、会議の開催に必要な定足数を満たしておりますことを申し添えます。

今回の専門委員会は第11回目に当たりますが、初めて東京を離れて開催する委員会となります。今回の現地視察、本会場の準備を含め、輪島市の方々には大変お世話になりました。輪島市を代表いたしまして、梶文秋市長よりご挨拶いただきます。よろしくお願いいたします。

【梶市長】 皆様こんにちは。今ご紹介いただきました、輪島市長をしております梶と申します。今日は国土交通省の住み続けられる国土専門委員会、11回目という回数を重ねられ、初めて地方へお出ましをいただいたということで、その最初が私ども輪島市であるということに大変ありがたく感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

実はこの輪島市を含めて、周辺の3自治体とあわせて4つの自治体で奥能登広域圏というものを構成いたしております。そんなことも含めまして、奥能登広域圏の組合長という立場も含めて、少し現状を皆様方にお話を申し上げ、会議の何かの話題にさせていただければと思っております。

奥能登広域圏というのが昭和52年に結成されました。そのときは2市4町1村、7つ

の自治体のございましたけれども、それが昭和52年に2市2町ということで、4つの自治体になりました。いずれも地形上から言いますと半島地域の先端にあることから、非常に人口減少が著しく進んでいる、これが2市2町共通した悩みであります。

もう一つは高齢化率がそれぞれ非常に高くなっているというところも同じでありますし、また一方で財政力が非常に脆弱になっているということが3つそれぞれの共通点ということになります。

人口の減少度合いで言いますと、奥能登広域圏ができたときは12万7,000人ぐらい人口がありました。この人口が現在どのようになっているかといいますと、6万7,765人。これが住民基本台帳の人口でありまして、53.4%。実はその前から比較すると、もっとも人口は減っているところです。輪島市の高齢化率は43.3%で非常に高くなっておりまして、この43.3%は逆に2市2町の中ではまだ少し比率が少ないということになります。

そして、財政力の点でいきますと、財政力指数は0.22というところが4つの平均になります。したがって、地方交付税の制度というのがありまして、これが財政上、それぞれ自治体にとって大きな財源になっているというそんな状況にあります。

私も輪島市に関して少しお話をしますと、平成18年に隣接する門前町と合併をいたしました。本来、この平成の合併論議の中では、国の立場から見れば2市4町1村が1つになればどうだというお話がありましたけれども、人口に比べますと面積が1,130平方キロという非常に広大な面積になります。これは札幌や、あるいはさいたま市と同じぐらいの面積があるにもかかわらず、人口がその何十分の一という状況ですので、これは7つが合併するのは到底困難でしょうということで、まず4つから2つ、そして将来的に、場合によっては1つになることもあり得るかもしれませんがということで隣の門前町と合併いたしました。

合併してから翌年に能登半島地震がありまして、全壊あるいは大規模半壊が562戸、それから、半壊が1,188戸、こういう大変大きな被害を受けましたけれども、当時、合併した門前町の高齢化率は49%でしたので、震源地に近い門前町を助けていこうということで、いろいろとこれまで復興対策を行って、あれから何とか11年という年月がたったわけです。合併から12年、能登半島地震から11年ということになりました。

この輪島市では、こういった状況の中でありまして、観光対策で何とか生きようということを考えてきました。観光対策というのは、産業として大きなものがあまりない

ということから、交流人口によって少し地域を高めていこうということでありまして、輪島市は大きく言えば3つの里構想で動いています。

1つは平家の里であります。これは、平家が壇ノ浦で敗北をしまして、1185年に鎌倉幕府になるんですが、1183年に壇ノ浦で平家が滅亡した。そのときに、ときの大納言、平時忠が能登へ流されました。その子孫が現在、上時国、下時国ということで、平姓を捨てて、時国という姓で健在であります。この平家が相当名士的な商売を行いまして、塩づくり、あるいは廻船、千石船で日本海を往来するという形で地域を育ててくれました。ただ、大納言という非常に高い地位ではありましたが、単なる平家の落人伝説ではなくて、義経がこの地域を通して、東北、藤原へ行ったということなど含めて、平家というものをもっと表に出していこうということで、平家の里。

もう一つは禅の里。すいません、おそらく挨拶は1分か2分で終わると思っていたと思いますけれども、せっきくの機会です。禅の里というのは1321年に福井の永平寺からおよそ77年おくれて、この輪島でといえますか、合併した門前町で曹洞宗の2つ目の大本山として開山いたしました。このときに開山した瑩山紹瑾という和尚が3年たつてすぐ峨山韶磧に代渡しをしました。この峨山という人が全国の1万7,000のネットワークをつくっていったということからいけば、この總持寺というものをしっかり打ち出していきたい。ただ、明治に大火に遭いまして、大本山は横浜の鶴見に移転いたしており、こちらのほうは祖院ということになっております。あと3年すれば能登半島地震の修復が全て終わると、それから、1321年開山から700年というちょうど節目を迎えますので、こういったことを含めて、この禅の里をいま一度、しっかりと観光に生かしていきたい。

あとは漆の里です。漆は残念ながら、180億の生産高が現在39億ということで、非常に落ち込んでいるわけでありまして。この3つの里を守りつつ、これを題材にして、年間120万人訪れます観光客の方の数を何とかして増やしていきたいと思っています。地元としては、農業もあり漁業もあります、半島の先端ですから。漁業のほうは目の前に職場があって、若い人たちが結構この土地に住んで、その跡を継いでくれています。一方、農業のほうは、農業者の平均年齢は70ですから、農業を営む、それから、これを受け継いでいくというのは非常に困難な地域事情があります。

こういうところでもありますけれども、しかし、一方で大切な文化財がいっぱいあります。おかげさまで人間国宝が3人ということになりまして、漆の里としては、そういう方々を

中心にしながらしっかり立て直していきたいと思っています。

町の中を少し皆様方にごらんいただいたと思いますけれども、国土交通省のいろいろな補助制度を受けまして、電線類の地中化を結構やってまいりました。普通の通りへ行くと電柱が、こちら側から向かい側のうちまでの間に電線がどんどんつながってしまっていて、これは非常に街並みとといいますか、景観上、私たちがごく自然に青空を見られるはずなんですけど、全くそれを阻害しています。電線類の地中化をすることによって、遠望しても山全体がはっきり見えたり、ある意味では空を取り戻したと。それから、街並みもお互いにセットバックをして、まちづくり協議会によって街並みを少し趣のあるものにしようと、漆器屋さんの多いとおりは漆器屋さんの雰囲気を生かして通りを統一化しようということをいろいろやってまいりました。

何とかいろんなことをやっておりますけれども、移住・定住というところに力を入れてまいりました。ここ3年ぐらい見ても、1年間平均25人ぐらいはIターンでこちらのほうに来てくれています。これはいろいろな魅力づくりを進めていく過程でこういうことができるんですが、一方では人口の減少とは比べものになりません。高校を卒業して1,000人ぐらい出ていって、地元に残る子供が10人ぐらいしか残らない。それが大学へ行って卒業して帰ってきて、こちらに働く場所があればそんないいことはないんですが、これがなかなかかなわず、人口の減少度合いは25人ぐらいの移住者が年間あったとしても、とても追いつくという状況ではありません。

こういう中で高齢化率の高さもあって、いろいろな交通機関とのバランスの問題が出てきます。鉄道が廃止されて、かわりにのと里山空港ができました。だけど、やっぱり鉄道がないということは非常にマイナスであります。空港はとにかくできましたけれども、首都圏からフライト時間は45分ぐらいで能登におり立つことができるわけですから、これも生かしていきたいと。しかし、産業撤退というのが ですから、一方で過疎化の進んだ奥まった集落ではバスの路線が廃止されていきます。そこに地元自治体として、今度はその人たちの交通機関の確保ということで、スクールバスを使って、地元の高齢者をスクールバスの隙間に一緒に乗ることができる、相乗りバスという言い方をしていますけれども、そういうことをして交通の便も何とか確保しています。

千枚田があり、三大朝市があり、いろいろ財産がありますが、しっかりと地元としてはそれらを生かして、これから頑張ってもらいたいと思いますけれども、おそらく住み続けることができる自治体につながるかどうか、精いっぱい頑張ってもらいたいと思いますの

で、またいろいろと地方の現状ということでご理解いただければと思います。

大変長い時間申しわけありません。失礼しました。(拍手)

【水谷課長補佐】 本日はお忙しいところありがとうございました。梶市長におかれましては、この後、公務の関係でご退席されます。ありがとうございました。

【梶市長】 申しわけありません。ありがとうございました。

貴重な時間に大変駄弁を申し上げて申しわけありません。よろしくお願いします。

【水谷課長補佐】 事務局から議事に入る前の予定は以上となります。また、カメラ撮影はここまでとさせていただきますようよろしくお願いいたします。

これ以降の議事運営は委員長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【小田切委員長】 ありがとうございます。それでは、議事を進めてみたいと思いますが、それに先だって、今回ははじめての外部での委員会となりますが、雄谷理事長をはじめとする佛子園の皆様方、あるいは事務局の皆様方もいろいろ調整をしていただいて、ほんとうにありがとうございました。こういう形で実現することができました。

さて、今日は議事にありますように、資料1と資料2を使って事務局よりご説明いただいた後、引き続いて資料3により、「ごちゃまぜ」をキーワードに佛子園が取り組んでいる地域づくりについて、先ほど来お世話になっております雄谷理事長様よりご紹介をいただきたいと思います。

この2つの議論は一括して行いたいと思いますので、それでは、まず、事務局より資料1及び資料2の説明を、これは小路企画専門官にお願いしてよろしいでしょうか。お願いします。

【小路企画専門官】 事務局より、資料1と資料2を中心に用いまして説明させていただきます。

まず資料1をお開きください。1ページ目は前回は提示させていただきました、この委員会の3カ年のテーマでございます。今年度は「コミュニティの再生、内発的発展が支える地域づくり」でございます。2ページも前回の委員会でお示ししている今年度の審議事項ということで、それぞれのテーマについてのより具体的な内容について記載させていただいております。前回もお話ししておりますので省略いたします。

それで、前回の委員会で委員の先生方からいろいろご意見を頂戴いたしました。それを受けて、3ページと4ページ目の資料を今回の議論の中心的なペーパーとして用意させて

いただきました。1つ目がコミュニティーにかかわる問題でございますけれども、これにつきましては、新たな価値観に基づき人と人がプラットフォームや場というものを形成する必要があるのではないかと。さらには、それが持続可能な形となるようなことで、再生産可能とここでは書いてはいますが、そのようなプロセスデザインを描いていく必要があるのではないかとということでございます。

現状認識でございますが、前回も紹介させていただきました地域運営組織も含め、従来型のコミュニティーの活動を超えて、NPOとか株式会社とかいうものを多様な主体という形になって施策が展開されているということがございます。

それも踏まえて今後の方向性ということで、特に情報通信を含めまして、双方向型のコミュニケーションツールというものが非常に広がっている中で、それも含め、さまざまな技術革新というものを活用することで、新たな価値観に共鳴した人と人がつながるということで、また、今までにはなかった新たなコミュニティーが形成されるのではないかと。そういうコミュニティーが形成されるためのコミュニケーションがとれるようなプラットフォームとか場というものを確保する必要があるのではないかとということでございます。

そのようなプラットフォームや場とかをつくる上においては、行政と民間が適切な役割分担と連携で行う必要があるのではないかとということ、これらに関連する参考事例といたしまして、本日ご視察いただいた「輪島KABULET」の事例ですとか、あとは、前回もプレゼンしていただきました、Next Commons Labの例とかいろいろあると考えております。

続けて4ページ目をお願いいたします。もう一つのテーマでございます、地域の内発的発展につきましては、質的にも量的にも取り組みが広がるような施策を検討すべきではないかとということ、現状認識につきましては、これは前回も紹介いたしました、現在の国土形成計画におきましても記述している内容とほぼ同様の内容でございますけれども、地域住民などが当事者意識を持ってコミュニティーデザインを描き、それに基づいて地域資源を活用しながら内発的発展の実現に取り組むという事例が広がりを引き続き見せているところでございます。

さらに、それをより深く、広く展開させていくためにということで、今後の方向性ということの一つ書かせていただいています。個々の取り組みを深化させるためには、これは一例として地域間の学びの場ということを書かせていただきましたが、そういうものをより広げていくということ。あと、新たなコミュニティーデザインを描く地域においては、

その前提となる行政による政策デザインを示す必要があるのではないかと考えております。

2点目のポツですけれども、地域づくりの活動の担い手を増やすためには、定住人口・関係人口に内在する活動人口の拡大が必要だと、そのための方策というものをより具体的に検討する必要があるのではないかと考えてございまして、参考例として、行政が政策デザインを示して行動しているものとか、より内発的発展を広く展開している事例とかいうものを示させていただきます。

次に資料2をお願いいたします。こちらにつきましては、内発的発展に関連いたしますプロセスデザイン・コミュニティーデザインに関する我々の整理した資料をごらんいただきたいと思っております。

まず初めに1ページ目をごらんください。これは小田切委員長の資料から引用させていただいているものでございまして、内発的発展というもののなかで、外部アクターの連携という中で、一般型内発的発展と新しい内発的発展という切り口が一つの議論になるのではないかと考えております。

次の2ページ目をごらんいただきますと、これは昨年度も関係人口の絡みでいろいろ議論させていただいた、ステップを踏んだ地域づくりの中において、この新たな内発的発展における定住人口とか関係人口の拡大というものを模式的に示しているものでございまして、一番下に赤で囲んでいますとおり、昨年度も議論いたしました、つながりサポート機能というものが段階的な地域づくりの中でも大きな役割を果たすと考えているというイメージで作成したものでございます。

3ページ目はちょっとまだ生煮えのものでございますが、我々が考えていた、コミュニティーの形成というステップをつくっているところでございます。今まで原型なので、明確にできていなかったものが、そういうコミュニティー創造拠点というもののなかで徐々にコミュニティーが形成されていくのではないかと。さらにつながりサポート人材と書いていますが、こういう機能も含めて、そういうものがより充実、質的にも量的にも拡大していくことが一つのコミュニティー形成のあり方として考えられないかと考えております。

4ページ目は前回お示しした資料とそれほど大きく変わっておりません。関係人口という文脈の中で、より対流促進を深めていくことによって関係人口を増やしていくということが将来的な地域の一つのあり方として考えているということでございます。

最後に5ページ目と6ページ目をお願いいたします。これはコミュニティーデザインの

あり方ということで、行政サイドの視点、住民サイドの視点ということで、行政からすると住民参画をより促進していくというのをはしご状に示したものでございます。6ページ目の階段になっているものが、住民が参画していくプロセスについて手順を示しているところでございます。

最後に7ページをお願いいたします。こちらは内閣官房と内閣府のほうで小さな拠点づくりにおける活動ステップを整理されていますけれども、こういうステップを踏んだ地域デザインというものも、コミュニティーデザインの一種として考えられるのではないかとこのところでございます。

私からの説明は以上でございます。

【小田切委員長】 ありがとうございました。

あわせて、よろしければ大変貴重な資料が出ております参考資料2について、非常に重要な資料が出ておりますので、ごく簡単にご説明していただいでよろしいでしょうか。

【小路企画専門官】 はい。簡単に説明させていただきます。

参考資料2をごらんください。移住に関する定量分析ということで、これまでも示させていただいたものの新たな切り口ということで示させていただいているものでございます。

1ページ目、かなり字が小さく書いていて恐縮でございますけれども、これは三大都市圏、黒く塗りつぶしています東京圏、大阪圏、名古屋圏と、合わせて11都府県になりますけれども、そこ、それ以外の各市町村との出入りというもので、三大都市圏外の市町村に対して転入が超過しているものについて、実はこのデータは24年から29年までの6カ年分のストックしかまだございません。それらについてデータが住民基本台帳人口移動報告のデータ集の中に入っておりまして、それをもとに分析しているものでございまして、この文字が書いているものが1ページの右下に書いてございまして、86市町村ございまして、これをプロットしているものでございます。

より拡大したものについては次のページ以降でございますので、またごらんいただきたいと思うんですが、1点留意事項がございまして、この1ページ目の注2のところ、データをダウンロードしますと、「調査していないため該当数値がない」という項目が出てまいります。我々がそのデータを見る範囲においては、転入・転出が極めて少ない自治体については、この該当数値がないというデータになりまして、そういう意味において、きちんとしたデータが我々のほうとしては把握できないというのが、とりわけ小規模市町村において、実は出てきているというのがございまして、そういうデータ上の制約もございまして、

特に離島とかいうところで社会増が生じている市町村がここからは浮かび上がってこないというところが一つ、データ上の制約としてあることはご承知いただきたいと思います。

以上でございます。

【小田切委員長】 ありがとうございます。

若干補足させていただきますと、前回、首都圏に対する動向だけを単年度でやったものを三大都市圏に拡大して、複数年度、6年間にわたってやっていただいて、これは膨大な計算なんですけど、そのことによって、いわば、頑張っている市町村がくっきりと出てきております。我々がふだん話題にしているようなところの名前が出ておまして、まさに輪島市が見事に出てきておまして、後でお話いただく雄谷理事長の成果がこういう形で出ているのかもしれませんが。ということで、非常に重要な資料が出ておりますので、補足させていただきました。

それでは、時間がかかって大変申しわけございませんでした。いよいよ雄谷理事長からお話をいただきたいと思います。ビデオもご用意していただいているのでしょうか。楽しみにしております。それでは、ご準備お願いいたします。

(ビデオ放映)

【雄谷理事長】 どうもありがとうございました。

ああいうのが結構日常的あるというか、そういうのが実を言うと職員に対してもすごく影響がありまして、今日はごちゃまぜという話を少し。イベントもいいんですけど、日々、皆さんの周りに、ふらっと行って、何をしてもない場所、子供も若者も高齢者の方も日本人でない人もふらっといる場所ってあるのかなということを少し考えていきたいです。

ちょっとうちの説明をしますと、これが20年前につくったビールの形ですね。いろんな拠点がありますが、ちょっと説明すると、多分日本では一番最初の農福連携をやったところなんです。今は農福連携というともうあれですけど。あと、先ほどの廃寺の例がありましたとか、これは同級生の馳です。「俺を一番風呂に入れろ」と言って、ほんとに10年前に来て、頭に雪が積もっていますけど。

これは西園寺で10年前に起こった例なんですけど、この人は重度心身障害で首から下が麻痺です。あるとき、ここの足湯に入っている高齢者の中には元気な人もいれば認知症の人も知的障害の人もいるんですけど、あるとき認知症のおばあちゃんが自分のもらったゼリーを彼に食べさせようとするんです。僕はたまたまその場にいたんです。そしたら、彼は首の可動域が麻痺で少ないものですから、向けないんです。でも、来ているのはわか

る。でも、おばあちゃんも手が震えていて、ばあっとこぼれる。僕は西圓寺ができる前、2年間彼にリハビリをやっていたんですけど、なかなか首の可動域が増えない、麻痺が治らないと。この認知症のおばあちゃんと彼が、3週間で首の可動域が左右で30度も改善されたんです。びっくりしまして、何でこんなことが起こるんでしょうか。福祉のプロですよ。それが、福祉のプロをほったらかして、2人かかって元気だと。で、二、三カ月たったら、今度、おばあちゃんのところのお嫁さんが来たんです。「理事長さん、いつもお世話になっています。うちのおばあちゃんはほんとに深夜にどんどんお出かけしちゃって、週に2回も3回も出ていたがめっきり減りました。ただ、1つだけわからないことがあるので教えてもらえませんか」と、「どうしましたか」と言ったら、「私が西圓寺に行かないとあの子が死んでしまうと言っている」と。死なないですけどね、日本だから。そうすると、認知症の人が彼を元気にして、重度の障害のある方が認知症の方を元気にする。それはやっぱり高齢者とか障害者とか子供とか住民とかが今まで縦割りで排除されてきたもの、別に排除するつもりはなかったと思います。戦後の日本は何とかして保護しよう。しかし、だんだん地域力がなくなってきたら、その縦割りのいろいろなことが実は弊害になってきた。やっぱりそういうことがたくさんある。

ところが、見ていると、10年間で55世帯から75世帯に増えたんです。ここは人口急減です。周りは田んぼしかない小松市です。なので、20世帯増えた理由を聞きました。若者が戻ってきたり、定着して親の家の隣に。居心地がいいんです。「何で居心地がいいんですか」と言ったら「いろいろな人がいる」と。「いろいろな人ってどんな人ですか」と言ったら、「地域の人がいれば障害のある人もいる。奇声を上げたりするのでびっくりしたけど、何か居心地がいい」と。そしたら、我々も何をやってきたのかなということを福祉の医療のプロとして考えると、どんな状態であっても人は機能しているということを考えると、そういう場所をつくっていったらどうなるんだろうということに気がついたというか、それがいろんな活動になって、これは美川の例です。障害のある人が高齢者とか社会福祉法人、駅舎を全部預かっていますけれども、乗降客数は減っています。しかし、駅の利用者は1.5倍になっています。日本で唯一宴会予約をとっている待合室。よかったです。すごく人気があります。

S h a r e 金沢は総理が3年前に来られて、その後、総裁選が終わったから言いますけど、石破さんも来られて、最近では野田聖子さんも来られて、この写真は県内でテレビ局とか流れたんですけど、野田さんと僕は同じような年なんです。野田さんは1つ上かな。

いろいろな人が来て、このShare金沢というのは私たち社福だけじゃなくて、こんないろいろなクリーニングの人とかデザインとか音楽関係とか、みんながこの町をいろいろな形で協力しながら支え合っている。

これは日本版C C R Cの構想有識者会議の中で出たデータですけど、これは7年、5万4,996人も追いかけてつくったデータです。これは宮城のデータですけども、生きがいのある人は3倍も生存率が高いと。あるいは、次のデータに行くと、これはシカゴですけど、人生の目的をあまり感じていない人と強く感じている人では要介護になるリスクが倍も違うんです。そうすると、地域の中でどうやって暮らしていくかということが、実を言うと予防という観点、人生100年という観点でも非常に大切になるということで、僕は実を言うと、金沢大学の医学部で公衆衛生学を教えています、そういった観点を人の目で見えていくと、簡単に言うと、人は人と交わるだけで健康になる、つき合う人やグループでその人の行動が決まる、あるいは、人とのつながりから、オフィシャルなサポートじゃなくて、自然発生的なサポートが生まれてくる。

これは、実を言うと、3月29日に自民党のほうで、これ、松田さんは何かきのう話題に上がっていましたよね、逆参勤。このとき、松田さんが逆参勤の話をして、僕がごちゃまぜの話をしたんです。どんな話だったかということ、人生100年が今、政権与党である自民党もそうですけど、これは総理に上申されましたけど、100年以上生きるときに、時間もお金もそういった作り方を個人ベースで考え直そうというのがあるんですけど、そこにはやっぱり大きな観点が欠けているということで、僕はこっちをつけ加えないとだめなんじゃないのという話をしました。これはなぜかということ、このリンダ・グラットンというのはライフシフトで、西洋の考え方で個人なんですけど、日本はどちらかということ、個人ベースで考えていくよりも地域ベースで考えていくという東洋の発想なんです。そうすると、こういったところから、実を言うと世界に先駆けて少子高齢化、人口急減に対応する日本のやり方が世界をリードするんじゃないかという考え方を持っています。この間、5月29日に出た政調会から政府に出されたやつには、うれしかったのが、機能するとか社会的排除のないとか、制度縦割りとか、ごちゃまぜとかきちんと入れていただいたので、ありがたいなと思っています。今日はその話を少し進めながらやっていきたいなと思います。

これは、うちの本部です。白山市の例です。11万人ぐらいで、ご多分に漏れず少子高齢化、人口減少。ところが、金沢は人気がありまして、今こういったところが子育てして、

これは、40年前にうちの本部に隣接している団地なんですけど、団塊の世代の団塊ジュニアは出てしまった。そうすると、孫はいませんから、この団地は高齢化オンリーで、どうなったかという、ショッピングモールが全部潰れて、これは全国の流れです。こういう層をほったらかすと、またこんなことになりますので、こういった人たちをどうやって地域にとどめていくかという問題が非常に大切になるということで、こういった本部なんかもつくっています。

これは、住民自治室ですね。地元の人がお食事して、隣で職員は働いています。グループの話も、これはグループホームの人たちがいる。フリーアドレスです。職員は好きに。でも、おもしろいんですよ。離職率、圧倒的に減りました。残業も減りました。職員は職員で、ゆっくりコーヒーを飲んだりする時間もいいんですけど、そうするとそれでズルズル引っ張ったりするんですね。職員は何よりもおしゃれになりました。人が普通に入ってくるということで。

この人は、しめ縄づくりの名人なんですけど、この人は知的障害の方で、私が手伝ってあげると、そんなスキルないんですけど、はさみで切ろうとしたんですね。この人は認知症のおじいちゃんなんですけど、もうお嫁さんの名前もわかんないんですけど、バシッとつくったら、すごいしめ縄つくれた。で、こうやっている、だんだんいろんな人が元気になる。

この人は、2年前にうちに来た人なんですけど、7年間ひきこもりだったんです。7年間ひきこもりだったんですけど、近所のおじさんがうちに連れてきたんですね、で、ボンと置いていったんです、何とかしてくれと言って。最初に来て言った言葉が、「子供だ」って。ひきこもっていて、夜中の2時、3時にコンビニ行ってカップラーメン買って家にひきこもるとい生活だったので、テレビ以外で子供を見たことがないと。子供を見たら、「子供だ」って言ったんです。それから今日の今日まで一度も休んでないです。7年間ひきこもっていた人ですよ。ひきこもりを治す薬って、ありますか。ないですよ。外科的な手術もないですよ。じゃあ、ひきこもりになったらどうやって治しますか。それが第三の医療、公衆衛生学だと僕は思っています。

この人は、ほかのところでダンス講師をしていたんです。股関節がだんだん開かなくなって、それで教えていてもだんだんわかるようになって、「先生、大丈夫？」って言われるようになった。続けられなくなってやめたんです。で、うちの近くに住んでいたの、うちのゴッチャ！ウェルネスにふらっと来たんです。したら、この人、さっき登場しました、

しめ縄を切ろうとしていた人、知的障害の高齢者の方ですけど、「私がまた治してあげる」と。治せるわけじゃないですよ。だって、この人、石川県で一番って言われる整形外科へ行っ、原因がわからないって。CT撮ってもレントゲン撮っても理由がわからない。全く異常がないんです。でも開かなくなっていって。で、二、三カ月したら治っているんですよ。何でって聞いたら、何か楽になった、すとーんとした。ここに来て、治してあげるって言われたら、何かすとーんとなった。何で治ったかもわからないです。だって、原因がわからないですから。原因のない股関節の異常、外科的な手術もできませんし、服薬なんかあるわけない。そういったことがたくさん起こり出したんです。

この人は、ADHD、多動の人です。小学校にいられないです。ところが、うちに走ってくるんです、いられなくなったら。この子、1歳半なんです。隣のお寺、すごくお経あげてるんですけど、そしたら彼は手を合わせてて、お参りしなきゃねと言ってるんです。1歳半の子は、お寺でお参りするなんていうことは教育的には教えられてないんですけど、手を合わせていますよね。こういう関係性が人を元気にしている。

関係人口の話、先ほど小田切先生の話の中にあっただと思いますけど、僕はこの関係人口がやっぱり世の中を変えるとと思いますね。資料はちょっと交流人口になっていきますけど、これは最近、関係人口と言うほうがふさわしいかと。オレンジのところは、従来の福祉や医療を必要とする人とそれを支えるサービス側の人間の合計数です。青いところは、温泉に入り来たりビール飲み来たり、全く関係のない人たち。1日1,000人ですよ。11万人の都市で、イベントも何もやってなくて40万人来る。佛子園さん、何で商売うまいんですか。そば屋なんか簡単にやって何でもうかるんですかって。別にもうかってはいませんが、障害のある人たちの賃金になっていくわけですけど、佛子園の能力というのは、人を集める能力なんです。人が集まるところに消費が生まれる。ですから、商売が上手だとかではないんです。さっきの西園寺もそうですけど、拠点をつくと、関係人口が概ねこういうカーブで上がっていきます。そうすると、そこには今度、世帯数がさっき20世帯増えた、輪島もそうです、Shareの周りもそうです。

ですから、そんなところに、日本の人口急減はそんな簡単には直りませんが、少なくとも残存の力でやれることはまだまだあるな。それはやっぱり、社会的排除をしないことによって、日本はもっともっと元気になる。人口が減ってとまらないのは当然ですけど、でも、障害のある人や高齢者、そんな人たちがどんどん機能していけば、おもしろくなっていく。

ということで、皆さんに輪島KABULETに来ていただきましたけど、私、佛子園と青年海外協力協会を連動させまして、開発途上国から年に1,000人帰ってくるんですよ。その人たちを全国に全部振り分けて、これ、全部同時進行しています。2年後、3年後ぐらいには輪島の拠点のように開いていくということで、今一番近いのは安芸太田ですね。来年の春にオープンします。そんなことを取り組んでやっていく。

これが今の……、これは前の、さっきの、こんなだったんですよ。ひっどいでしょ。ここは納屋だったんで取り壊して、ここは新築して、これ、高齢者デイです。これもこうなりましたね。

これはゴッチャ！ウェルネスです。蔵ありますよね、中でここは蔵ですよと言っていた。これ、蔵で、こっちを使って、ここを新築したわけですね。隣の空き地を。そうするとこうなると。

これは、さっき皆さん見られたとおりカフェKABULETに変身するわけです。

こんなことをどんどん周りを使いながらやっていくということで、Reイノベーションという話。ちなみに、三ノ湯、七ノ湯の三は、この三です。輪島塗の名工、人間国宝です、三谷吾一さん。角偉三郎さんも三がついているんで、三ノ湯の、ここから、漆の名前。

これ、三津七湊ということで、三ノ湯、七ノ湯っていうのはここから来ている。

今日皆さんにお乗りいただいたのは、今実証実験が始まっているということで、観光客も、買い物難民、通院難民もみんな一緒に使うような手立てはないもんだろうかと考えてということで。

最近、輪島やっておもしろいなと思うのは、僕たちは別にインバウンドとかそんなことを考えたわけでは全くないです。観光客とか関係なしで、地元の人がいかにいる場所をつくっていったら、何となくだんだんインバウンドも入ってきた。韓国客も、名月のおやじさんみたいに連れてきちゃうわけ。タオルなけりゃうちのタオルやると言って、だんだん連れてきて。だから、確かにおいしいもの食べたり、キリコみたいなのをするのもいいんですけど、連れてくる理由は、輪島の人たちとのかかわりがほんとにおもしろいと思って皆さん来る。だから、あっという間にリピーターになるんですよ。もう一度来るという話がある。

配食なんかも、こういう拠点をつくと、独居の高齢者を徹底的にサポートできる。

ゴッチャ！ウェルネスなんかも、こういう周辺でゴッチャ！をやる人たちがこんなに点在してくると、地域ごと元気になっていく。さっきあった札を返すやつありますよね、あ

れで全部プロットしています。これにクリニックなんか入ってくると、今度は、医療、介護、それから一般的な活動のサポート、運動に至るまで、この中で情報を使いながら人を支援することができる。

「生涯活躍のまち」というのは、全国で114団体。何らかの形でごちゃまぜがやりたいということで手を挙げられている方がいるということで進めています。

最後に、ごちゃまぜの、どうなっていくかというのを、災害という観点から、これは安芸太田です。今、広島のア芸太田からサポートかけています。被災直後から僕らも入ったんですけど、ここですね、坂町。広島市からすると、ここです。今、拠点が、安芸太田がここなので、ここからアプローチかけて災害地に支援に行っています。1時間半ぐらいかかるんですけど。ここも温泉が出まして。で、やっぱりみんなへとへとになるんですね。そういったときに、立て直して、また次を送り込むということをやって、災害地支援をしています。

小屋浦地区からさらに、ここからアップしていくと、7割被災ですからね。こんなところだったんですけど、三方崩れてどーんといっているんで、こんなふうな。東日本大震災も入りましたが、ここもすごいですね。大きな企業とかが被災してないので、あんまり表に出てこないんですよ。民家ばかりなので何か訴えかける力が弱いというか、マスコミもそういったところはあんまり最近やらないじゃないですか。でも、まだこんな状態ですよ。これ、土砂ですね。これ、かき出すのに、1日100人かかってもかき出せない。今年の夏でしたから、10分間活動したらすぐ熱中症になりますんで。家の中、もう50度とかなるんです。もう10分以上はやれない。全部土砂ですね。撤去できない。撤去すると、今度は天井が落ちるんですよ。危なくて素人はなかなか手を出せない。

後ろは瓦礫。小学校ですけどね。

これ、東日本のときに唯一自死がゼロだったのが宮城県岩沼市なんです。これ、何で自死がゼロにできたか。仮設のときです。仮設から最後、本移住で終了なんですけど、唯一自死がゼロだったのが岩沼なんです。普通は、益城なんかでもそうですけど、仮設に入るのに抽選します。そうするとどんなことが起こるかという、隣の人は全く知らない人が入るんですね。岩沼だけは被災した地域ごと仮設に移したんです。自死が起こるようなケースというのは、こういうところなんです。こういったところから、まずやられるんです。だから、まず最初に、ここを一番サポートしないとだめなんですね。家族で支え合うような人たちはまだ大丈夫なんですよ。だから、この関わる頻度を増やさないとだめなんで

すけど、誰がこれをしているかどうかというのは、地域の結びつきがあって、キーマンから聞かないとすぐ行けないんです。ばらばら入っていると、どの人が優先順位を高くしてサポートしないとだめかというのが、状況把握するまで1週間かかったらその間に自死が起こるので。

ということは、僕は、国土強靱化って言いますけど、確かに橋とか道路とかを強靱にするということは大切なんですけど、地域の住民がつながっている、そして、あいつは今放っておいたら危ないぞとか言える、そういうことこそがほんとうの国土強靱化じゃないのかなと。確かに元気にしたいというのはありますけど、災害からは逃げられないですし、そういったことに立ち向かうにしても、やっぱり人との関係性があるというのが、日本のいよいよ世界に発信する情報になるんじゃないか。

最後に、28日に佛子園本がダイヤモンド社から出ますので、全国、紀伊國屋書店とか、あとAmazonとかでお買い求めできますので、皆さん、よかったら、ぜひお買い求め。最後は番宣ですみませんでした。今日はご清聴ありがとうございました。(拍手)

【小田切委員長】 どうもありがとうございました。事実の報告であると同時に、非常に感動的なお話をいただきました。ありがとうございます。

少し時間についてご相談したいと思います。この委員会は15時までということだったんですが、いろんな事情によって押しております。あらかじめ、例えば15時15分までなどというのは、まず委員の先生方、交通関係、大丈夫でしょうか。そして事務局、大丈夫でしょうか。

【事務局】 はい、30分ぐらいまでは。

【小田切委員長】 そうですか。30分とは言いませんので。じゃあ、15分ぐらいまで延長させていただくということを前提にゆったりと議論させていただきたいと思います。

それでは議論ですが、まず20分程度、場合によっては30分程度、貴重な話をいただきましたので、雄谷理事長のお話に対するご質問を最初に集中的にいただき、やりとりしてみたいと思います。雄谷さんに対してのご質問いかがでしょうか。

それでは大変恐縮なんですけど、私からお尋ねさせていただきます。おそらく、ごちゃまぜという言葉は、なかなか訳せなかったプラットフォームという言葉の最も正しい日本語訳ではないかと思うんですが、そのとき私たちが気になるのが、多分そこには専門家がいると思うんですね。ただ放置してごちゃまぜではなくて、専門家が緩やかな誘導や緩やかなウォッチングしているという状態があって、そういうことが今日のお話からはなかなか

見えてこなかったんですが、ちょっとそのあたりを補足していただけませんかでしょうか。

【雄谷理事長】 専門的なスキルというと、社会福祉法人だとももちろん福祉のスキルというのはベースにあるわけですね。そこはいろんな人たちのアプローチをかけることによっていろんな社会参加ができるってなるんですけど、もう1つは、裏側で青年海外協力隊のスキルを使っています。PCM、プロジェクト・サイクル・マネジメントという住民主体型のスキルを使っています。隠し球で今日は言っていないんですけど。

どんなことかという、青年海外協力隊というのは、私は4年いましたけど、2年間ですよね。そうすると、日本人が行って何かをして成功させることができることもあると思うんですね。ところが、それでやって帰ってくるとまた消えちゃうんですよ。だから何が大切かという、任国の人たちが自らの手でやってこそなんです。日本人がやっちゃうとだめなの。みんな若手、僕もそうでしたけど、やりたいんですよ。ヒーローになりたい。俺がこの国を救うみたいな勘違いをするんです。ただ、戻ってきたら成功したとしても消えますし、失敗したら日本人が裸踊りして帰っていくみたいな話になって、やっぱりそこには住民主体という形があります。

プロジェクト・サイクル・マネジメントの手法というのは、例えば佛子園なんかが地域に入っていくときには、期待されるんです。佛子園さんが来たからこの地域を何とかしてくれるんじゃないかと言うんですけど、まずは言わないですね。言わない、やらない技術。聞かれるんですよ。どういうふうにしたらいいんですかねと聞かれるんですけど、僕らもノウハウを持っていますから、職員を送り込むと必ず言いたがるんですよ。ちょっと偉そうな、じゃあ、答えちゃおうかなみたいな話なんですけど、そこで言った段階でアウトですね。佛子園さんのお仕事になってしまうので、行ったらもう言わないと。うまい人がいるわけですよ。若手をうまくしゃべらすじいちゃんとかばあちゃんとかいるんですよ。そのときも、質問は質問で返したりとかして、決してこっちからは決定的な、こういったことができると思います的なことは言わない。ずーっと引きずり上げる。何に対して不安とか不満を感じているのかとかをずーっと引っ張り出して、じゃあ、それってどういうことですかみたいな。こういう場合どうしたらいいんですかねと聞かれたら、答えたくないんですけど、それって、え、どういうことですかみたいに聞き返すと、本人の話になっていくので、そこにやっぱり時間をかけるということはすごく大切ですね。でも、やっぱりいつも葛藤します。うちの職員でも、懇親会とか行ってお酒とか飲んで、調子に乗って、ああ、言われるかもしれないみたいなことを言うと、帰ってきてがっかりします。理

事長、ちょっと今日はしゃべってしまいましたみたいなことを。それを、お互いに主体はどこということを意識しながらやるというのが、ちょっとざっくり言った話ですけど、プロジェクト・サイクル・マネージメントという国際援助手法。

【小田切委員長】 ありがとうございます。

それでは、ほかの先生方、端から順番に、1人1問ずつ。谷口先生、お願いします。

【谷口委員】 どうもありがとうございます。今のお話とちょっと関連するんですけども、青年海外協力隊、僕も知り合いがいるんですけども、向こうでの仕事が消えちゃうというのと同時に、帰ってきて本人のノウハウを生かす場があんまり準備されてないという問題が結構あって、それですごくいいなと思ったところがあるんですね。むしろ今だとそういう意味では途上国が問題なのではなくて、国内の途上化が問題であって、青年国内協力隊をつくったほうがいいのではないかみたいな感じで、そういう意味で、関係人口を増やす上で何かそういう仕組みがあったほうがいいのではないかということ。

あと、ついでに、2問目になっちゃうかもわかりませんが、輪島だからできたんですかということですか。

以上でございます。

【雄谷理事長】 国内協力隊というのは、僕も青年海外協力協会の会長でもあるので、生涯協力隊活動というか、そういったことで、今日は総務省の人がいますので、何で総務大臣が出てきたかということ、地域おこし協力隊と青年海外協力隊をマッチングするという。

どんなことかということ、地域おこし協力隊は今、8,000人構想というのがあって、ところが人手不足なんです。地域で手を挙げているんですけど、人の補充ができないので、ということがもう現実問題として起こっています。

もう1つは、地域おこし協力隊は専門教育を受けてないというので、無駄打ちになることも多い。年間300万ですかね。で、最後、終わったら企業のお金が出て、それでということなんですけど、定着率がよろしくない。ということで、1,000人毎年帰ってくるわけですから、任国にいる間に地域おこし協力隊のデータを向こうに送って、隊員に送って、それで例えば鳥取だと。鳥取だったら、じゃあ、あなた戻ってきたらすぐ地域おこし協力隊で活躍しませんかというマッチングをするという、それを今、制度に入っていますので、そういう話をしていたって言ってくださいね。それをすると、青年海外協力隊員って、株式会社にほんとに勤まらないんですよ。何かすぐ辞めちゃうんです。ですから、それだったらそれで、もう行き場所を考えてやるかみたいな話になってきたのが1つ。

それと、輪島は、アもウもなく、市長とか皆さん来られて、ごちゃまぜにしたいんだと言われて、もうずっとねばられてで、うーんってなって、わかりましたと言ったので、もうマーケティングリサーチとかそんなレベルではなかった。この中で何ができるかということを考えて、見にきたらもう、さっきのKABULETのどこなんて、ほんとに、何ていうか、何だろーみたいな感じだったんです。ですから、最初、輪島市は、どこかのマリンタウンとか、ああいうところで、でかい広大な土地を用意するからそこでやってくださいって。そんな問題じゃないんですよ。「やっぱり皆さんがいる真ん中でやりませんか」と言ったら、「雄谷さんどこで考えているんですか」って言うから、「ここら辺とかおもしろい」と言ったら、「えっ、ここで何ができるんですか」って言うから。やっぱりイメージとしては、輪島の皆さんは、うちの本部の行善寺、結構でかい、ああいうのがどかんとと思ったら、今回みたいな形だったんで、僕はあれだったら、昔のたばこ屋みたいな、さっきほら、椅子が……。昔、ガラス戸あけると、たばこ屋のおばさんが番台にいて、何かあめ売っていたりとか、ほかにもちょっとしたベンチがあったりとか、あんなちっちゃいところからでも始められる。西圓寺も実を言うとそんな、まずはちっちゃい、もうこのぐらいの元手しかないですから、そこから始まったんです。ですから、仰々しくやらなくても、僕は、人がいればやれるかなと思います。排除さえしなければ大丈夫だと思います。

【小田切委員長】 松永先生、お願いいたします。

【松永委員】 社会福祉法人がこうしたまちづくりにかかわり、場をマネジメントされているというのはすごく印象的でした。一方で、今、人がいればどこでもできるとおっしゃいましたけど、やっぱり雄谷さんのリーダーシップとか価値観というものが、支援のあるべきスタイル、KABULETとかいろいろな施設に浸透している面が少なくないと思うんですね。魅力的な地域づくりというのは、社会福祉法人が先導するところもあれば自治体が先導したりとかたくさんモデルはあると思うんですけど、結局、行き着く先はやはりリーダーじゃないかということを改めて強く感じました。その辺を、真のリーダーとして意見をいただければと思います。

【雄谷理事長】 今、青年海外協力協会でやっていることが、大阪の摂津市で、駅前で文化住宅をリフォームして始めまして、反対に地方じゃないとできないんじゃないとか、でも、そこは、僕はもうほったらかしますので、それでもうまくいくんじゃないかなと思っています。ただ、やっぱり、物を見たりして肌で感じるこゝろって大切なことだと思うので、そういった意味では百聞は一見にしかずで、やっぱりごちゃまぜは一度見ていって…

…。木村さん来られたときね、だっぴいきなりピョンと飛び込みで来たの。で、別にやらせでも何でもなくて、障害がある、例えばこんな言ったりとか、普通にワーとかウーとか言っているよね。だから、見る場所を、とりあえず事例を示すことはできたので、そのことに対してはよかったかなとは思っていますけど。共感する人たちも出てきているので。

でも、この先々、また新しいモデルとか出てくるでしょうから、そこで突破する力はやっぱり必要になる。Share金沢、ほんとに大変でした。だっぴ、高齢者の施設と障害者の施設、お金の出所が違いますので、介護保険料率から出るものと、それから国税から出る施設整備のお金とは全く違う出所です。そうすると、お金の出所が違うから、この廊下は高齢者の廊下、この廊下は障害者の……。そういうのを突破するのは一事業所の人間が本来やることじゃないですよ。たらい回しになって、市の担当と全部やんなきゃいけないという苦しみはありました。

ビールをつくったときも大変でした。ビールをつくったとき、20年前ですから、福祉を食物にするやつが出てきたって話になって、僕の給料になるわけじゃなくて、全部障害のある人たちの雇用、全て100%、賃金でいくわけですから。あのときも大変でしたね。

行政監査って普通、5人ぐらいで来たりするんですけども、あのとき15人ぐらい来ました。今だったら、奥能登圏域では納税トップ3に入っていますから、福祉であったってきちんと納税する。障害がある人たちが働いて、倍返しですよ。もう20年間、ずっと酒税を払いっ放しですからね。

でも、リーダーの問題というのは、今これだけの情報化がされてきているので、今、僕は社会福祉法人の在り方検討会の委員をやっている、社保審に上がって、社会福祉法の改正という話で、色々なことが出てきたんですけども、護送船団みたいな、社会福祉法人、全国で2万件ぐらいあって、まだまだだめなところが多いんですけども、反対に若い人、今40代ぐらいの、株式会社とか社福じゃなくて、優遇制度を受けていない若い人がやっている活動がすごくおもしろい。それがみんなつながっているんで、社福なんかもうのまれるんじゃないですかね。僕、社福の役員でもあるので、おまえ、何言っているんだよって周りからよく言われるんですけども、でも、多分この3年ぐらいで世の中はひっくり返っていく。

だっぴ、雇いどめが65から70になる。今、とりあえず安倍さんは3年間で絶対決着をつける。そうすると、高齢者の枠組みが変わるわけですよ。今までだったら65だっ

たのが、70になると、少なくともその5年間で介護保険事業所はほとんど潰れていきます。そこで今、お客になっている部分が必ず単価ダウンするので、そうすると、この3年間で、ほっておいてもごちゃまぜをしなくてはいけなくなる日が来るんですね。縦割りを続けていてもいいですけども、反対にそんなことでは……。

でも、社会保障のぬくぬくした温室にいと、それは多分、見えなくなるので、そういったこともこの本に書いてあります。

【小田切委員長】 よろしいでしょうか。

ちょっとテンポアップして進めたいと思います。

どうぞ。

【沼尾委員】 大変興味深いお話、ありがとうございました。

こういう地域のごちゃまぜ空間、プラットフォームをつくるときには、ガバナンスの問題とマネジメントのバランスがとても重要になってくると思うんですけども、ガバナンスのところは先ほどご説明いただいたPCMの手法で対応されるということだと思のですが、実際に、いろいろな人たちの声をPCMの手法で聞いていくということが出来る場合はともかく、例えば既得権というのでしょうか、町内会、自治会などによる従来型の縦割りの仕組みの中で、多様な立場、特にさきほどの社福のもそうですし、ビールの話も、地域の住民も、いろいろな立場の方の意見をバランスよく意見を聞こうとすると、単純にPCMの手法を入れるということではきかない世界という日本流のものがあると思うんですけども、そこをどう工夫されているのかを教えてください。もう一つ、マネジメントについて、例えばこういうプラットフォームができると介護保険料が上がるのではないとか、自治体の介護保険事業計画の中で、サ高住は計画の枠の外なので、新たにサ高住が入ることで保険料が上がって困る、というような話を各地で聞くのですが、地域の福祉にかかる財源であるとか、あるいは利用者の負担を含めた行政サービスの需給バランスと、こちらの経営とのバランスについて、どういうふうを考えていらっしゃるのか、大変気になりました。

【雄谷理事長】 PCMは、実を言うと、関係者分析という。僕らは何でかという、開発途上国に行って一番怖いのが、反政府に突っ込むと、ほんとうに狙われたりするわけで、徹底的にやらないと自分が危ないんです。ですから、さっき、うちが入っていくと、明らかに黒船が来たとか佛子園が来たみたいな、当然起こるんです。地元社福にとっては脅威となるというのは当然の話なので、そういったことも前もって分析します。ここはど

ういうふうにおさめていったらいいかなとかというのを十分考えた上で聞くという。そこはリスクマネジメント、海外での技術なので、関係者分析をした後に、目的の問題分析とかをやっていくので、そこは地雷を踏んではだめという技術なので。

介護保険料の話がありましたけれども、確かにそうなんですよね。やっぱりほかから移ってきてとかという話で、保険料、誰が負担するんですかという出生地の問題ということですよね。ということなんですけれども、先ほどあったように、サ高住で働いている人がいる。サービス高齢者住宅に移りながら、拠点で働いている人もいます。税金云々と言っていますけれども、高齢者というものをお金のかかる対象として見るということはないですよね。

最近、福祉的M&Aという考え方もある。先ほどの魚屋さんの話をしたじゃないですか。続けたいんですけれども、続けられない。でも、福祉のエンジンというのは、社会保障ではある程度おさえられているので、そんな不安定のものではない。そうすると、障害のある人とか高齢者の人たちをきちんと有効利用することに動かせるんです。ですから、人材バンクみたいなもの。

今までは、高齢者とか障害者は税金を食って大変だねみたいな話だったのが、うちの拠点にいる精神の人たち、彼らがいないと、あの拠点は回らないんです。だから、僕らの今の法人の目標というのは、利用者スタッフ、職員という関係性をいかにマインドから取り払うか、そこがプロとして本物になれるかどうか。僕ら職員はみんなそれで飯を食っているわけですから、どうしても利用者さんとサポートする自分たちという感覚になるんですけれども、それを取り払うのは難しいです。それを必ずやる。

だから、例に挙げると、内定式とかあるじゃないですか。うちは今までも内定式をやっているんですけれども、でも、A型の利用者の人だって内定式をやらない。でも、職員はやる。これは明らかに差別というか、区別しているわけです。そうすると、職員から、内定式もきちんとA型の人やらなきゃ、僕らとマインドを同じに持っていけないよねというところからずっと続けて働けるようになる。

精神の人たちって、例えば輪島KABULETという名前の入ったワゴンが行くだけでも嫌なんです。周りの人は、輪島KABULETは福祉の施設だというよりは、総合的な温泉とかって思っているんですけれども、精神の人にとっては、輪島KABULETのワゴンというのは福祉サービスを提供するというふうにとると、そういうふうに見られてしまうということがひっかかって、もう出てこれなくなっちゃう、そんなことになるんで

す。ですから、そういったことも配慮しながら、美川駅なんかはすごく人気があるのは、自分たちが、私は駅で働いていますという、福祉施設で働いているという感じじゃだめなんです。だから、日本海倶楽部なんかは、ビールだけどみたいな、ちょっと格好いいんですよ。レストランで働いていますと。何々作業所とかそんなじゃなくて、そういうマインドも必要なのかなと。

でも、いずれにしろ、今まで世の中に貢献する側じゃないと思われていた人たちを、いかに残存能力としてまだまだ使える、やれるというふうに持っていかというのが楽しみですし、だから、ゴッチャ！なんかは、あそこで結構元気になって、どんどんいろいろなことがやれる人たちが出てきているんです。そのエビデンスをつくるのに時間がかかるので、金沢大学と組んで、どういうふうに地域に還元できているかというデータ取りを始めました。でも、これは時間がかかる。完璧な公衆衛生学のデータとするには10年ぐらいはかかっちゃうので、雰囲気ではしか伝えられないんですけれども、今、世界中がそういうデータ取りをしていて、日本が一番遅れていると思います。第三の医療という感覚では、日本は実は一番、地域力も、人がつながるといふことに重きを置いて、いい国なんですよ。でも、いいところをわかっていないというか、もったいない。

済みません。ちょっと、こんな……。

【小田切委員長】 それでは、3人の先生方、一遍に質問させていただいてよろしいでしょうか。それで、まとめてお答えいただくということで、申しわけございません。

【藤山委員】 今日はほんとうに、改めて感動というかですけれども、すごく爽やかで、風がそよいでいるような感覚が。今まで福祉施設はすごく閉鎖的な部分も多いので、何か中空の輪というか、佛子園さんは輪の中で循環はしているんですけども、1つじゃなくて、ちゃんとそこを、今日なんか道路がぶち抜かれているわけですから、そこへいろいろなものが、いっぱい並んでいる、そういうモデルはすごい、私はこれが循環型社会の基本形だと思っています。

で、思い切り現実的な質問なんですけど、ぜひ収支モデル。例えば福祉の部分があつて、ケアする場合と、雇用する場合がありますね。一般の方も利用される。その方の利用料金なんかもあると。初期投資は補助金なんかもある。それで見ていくと、どうやったらちゃんと合うのかなと。それを単なる今みたいに縦割り計算するから見えてこなくて、先ほど言われたように、ゾーンを連結してやることの、ある意味マジックというのがどれぐらいあるのかということと、もう一つ、私、今、徹底して介護分析、地区別の小地域でやった

らものすごい違うんですよ。住民1人当たり3万とか5万、同じ自治体でも平気で違います。1,000人になったら3,000万とか5,000万とか、医療を含めたら億を超えるんですね。それを今日みたいなことをやられていると、実はすごく浮き始めている可能性がある。例えば今日、トレーニングマシンを私がやらせてもらいましたが、あれ、結構高いと思いますけれども、フルセットで500万とか1,000万。でも、あれで転倒防止が四、五人できたら、絶対ペイしちゃうんですよ。だから、そこにほんとうはこういった取り組みの今後の持続可能性がすごくあるんじゃないかなと。そうしたあたりの紹介も含めて、その辺の収支モデルというか、今はどう整理されていて、将来、どういう展望をされているかというのをお聞きしたいです。

【小田切委員長】　　まとめて。玉沖さん。

【玉沖委員】　　今日は多くの学びと感動をいただきまして、ほんとうに感謝しております。ありがとうございました。

私は組織マネジメントというところでお尋ねしたいことがあります。地域振興のコンサルやプロデュースの仕事をしています。多くの中間支援組織のような形態の方たちから相談があるんですけども、その方たちの共通の悩みがあって、ご自身たちが取り組みたいことのアイデンティティーやポリシーと、組織としては経営していかなければならないので、ぼろもうけしたいわけじゃないんですが、持続性と利益を確保していくというところの狭間に悩んでいるという傾向を非常に感じております。

雄谷さんは、今日拝見した限りで誤っていたら申しわけないんですけども、組織のつくり方とか組織図的などところ、その組織マネジメント、雄谷さんがいらっしゃって、誰がいて、誰がいて、誰がいて、各プロジェクトをどんなふうに動かしていくというような組織図的な組織マネジメントのところに大きなポイントがおありなんじゃないかということを感じまして、そのあたりのことを教えていただけましたら幸いです。お願いいたします。

【小田切委員長】　　それでは、若菜委員、お願いいたします。

【若菜委員】　　もうあまり聞くことも限られてきたんですが、1つだけアドバイスがむしろ欲しいんですけども、私は岩手から来て、田舎で、まさにこういうのをしなきゃなと思っているおじいちゃん、おばあちゃんたちがいっぱいいる中で、お話を聞いていて、雄谷さんが持っていらっしゃる人を集めるスキル。でも、今日、いっぱいきれいなものを見せてもらったので、温泉だったら温泉がなきゃできないんじゃないかみたいな気もするんですけども、スキルもない、人を集めるものもないというところで、これから始めた

らいいよみたいな、アドバイスがあったらいいなというふうに思いました。

【小田切委員長】 それでは一括して、もし可能なら5分ぐらいで、済みません。申しわけございません。

【雄谷理事長】 収支に関しましては、これ実を言うと、まち・ひと・しごとのモデル事業になって、これはサステナビリティというものを前提に、ですから、20年収支ぐらいを全部、西園寺、B's行善寺、Share金沢、輪島はそれは提出していないと思いますね。この3つに関しては全部出しました。モデルでこういうふうになっていますというのは出しました。ですから、とりあえず、サステナビリティがあるというのは、僕は相当な意味であると思うんですけども、日本版CCRCで一番問題になっているのは、今、高齢者の移住ということで、どこか山の中をばーっと開拓して、デベロップして全員送っていくと、その人たちが10年、20年たったら、またそれがゴーストパークになっちゃうので、サステナビリティがどう転んでもとれない。お金の問題だけではなくて、緩やかに多世代から周りと融合していく感じがないとだめなんです。

収支のことにしましては、今、まち・ひと・しごとのマニュアルかな、生涯活躍のまちのeラーニングの中に全部うちの収支を出していますので、そちらを見ていただければ。ちなみにPCMとかのトレーニングとかも全部出ています。生涯活躍のまちのマニュアル化がされていて、前に国交省の伊藤さんとかに言われて頑張ってマニュアルをつくりました。よかったらeラーニングに入っていて、そうすると、今の手法とか、今日、お時間ないようですから、全部収支も、それから、僕らがとったプロセスとかも、全部時間軸で落としてありますので、見ていただければと思います。

あと、えーと……。

【小田切委員長】 範囲の経済性とかですよ。

【藤山委員】 要するに、これですごくほんとうは介護とか医療費が減っている感じがありますよね。実際に比べても違う事例が多いんですね。それが一種の成功報酬としても帰ってくるようなことが私は望ましいのかなと思っているんですが、その辺に関する見通しやご要望というか。

【雄谷理事長】 僕は、実を言うと、認知症の人たちとか高齢者の人たちよりも、よっぽどハードケース、強度行動障害の人たちとか、そういった人たちを相手にしてきたので、全然大丈夫というか、障害の多い人たちから見ると、自分をコントロールできない、ほんとうに暴れ出したら、職員が3人かかっても4人かかってもとめられない人たちの対応を

してきたので、少々のことであってもやれるというふうに思っているのがおもしろいですね。うちは障害分野から入ったので、できるはずだという感覚を持っているんですよ。ところが、介護から入っていくと、どうサポートするかという局面から入っているので、そのスタンスの違いもあるかなと思っています。でも、今見ていると、少なくともいい成果が上がってくるんじゃないかと。

次に、持続可能性の話とマネジメントがたしか出ましたね。僕は新聞社にいて、うちの法人に戻ったときに、うちの職員はまだ二十数人でした。今は750ぐらいなんですけれども、そのときに一番感じたのは、何で福祉の関係者って60とか70とかにならないと園長とかになれないのかと。みんな年功序列で、園長先生ってみんな年とっているんですけれども、一般の企業って、みんな大体30半ば、後半ぐらいから勝負に出て、失敗したりとかしながらやるというので、僕は、実を言うと、自分は事業を拡大するということは全く考えていなくて、人を育てられる人を育てたいという。人を育てるといことは何かスキルを教えればできるんですけれども、人を育てられる人を育てると、つながるんですよ。だって、僕がこの人を育てられると、少なくとも2世代つながりますので、ですから、そういったもののシステムは持っています。

例えば30代半ばで施設長トライアル制度というのがあって、普通、等級が上がっていきなきゃいけないんですが、飛び級とかができるんです。上司がこいつを施設長にしたいと言うと、1年間、給料は手当が5万アップするんです。その5万で部下との……、安倍もそうだったよね。

【安倍施設長】 はい。トライアルです。

【雄谷理事長】 施設長トライアルで、1年間は一月5万円ずつ出るんで、これですは人事権も会計権も全部渡すんですよ。1年やって、その5万で、とりあえず部下を飲み連れていったりとか、そこはやっておきなさいと。1年間済んで、やれるかなとなったらなるということで、今、うちの全盛期は40代前半ぐらいで、そこら辺がずらっといます。ですから、うちは、僕が細かいことを言わなくても、その拠点拠点で発信できるので、そこまでは大丈夫。ところが、次の世代がまだ弱い。だから、今30代ぐらいを徹底的にやれるネクストボードをやらないとだめだと。だから、彼女たちは、今、本物かどうか試される。

そこがやっぱりおもしろい、楽しい。そういった仕組みがいろいろなところあります。例えば全職員が新規事業を提案することができる制度とか、そうすると、それが採用され

れば、その責任者に1日でもなれる。人、物、金が全部つくのがありますので、そういうふうにシステム化。来年からは自分の今度は健康コントロールができる。週に2回以上、職員がゴツチャ！を使うと無料になるんです。職員が元気がないと、地域を元気にはできない。だから、そういうマネジメントも発信するという事は大事ですね。

今のも一部ですけれども、だから、僕らが服装を変えたのもそういうことだよ。つい最近まではダークスーツでいろいろなところに出ていたんですけども、みんなで決めたんだよね。僕らは誰に向かって仕事をしているのか。そうすると、地域の人たちとかかわり合っていくのに、スーツではお仕事をやれないのでということで、それでみんなで、じゃあ、せいので私服にしようという話を。それもみんなで相談して決める。

だから、職員室もフリーアドレスにしてオープンにした。でも、失敗したらやめればいいので、それは出ますよ。プライバシーを守れるのかとか、プロとしてほんとうは危ないんじゃないかとか、当たり前個人データも山のようにありますから、でも、それならやってみる。それをやっぱり若手がやるという。で、失敗もするんです。

ちょっともう5分とっくに過ぎている……。

【小田切委員長】 最後の若菜委員のご質問は、実は審議事項そのものです。こちらでのレッスンはどういうふうにはほかの地域に生かされるのかということですので、もしよろしければここからその議論をいたしますので、一緒に加わって、お時間は……。

【雄谷理事長】 一言だけお答えしていいですか。

【小田切委員長】 はい、どうぞ。

【雄谷理事長】 おいしいコーヒー1つです。コーヒー1杯でも行きますよね。本気でおいしいコーヒー1杯つくったら、それで相当いける。香りとかでも来ますし、そんなものだと思います。まずはおいしいコーヒーから。

【小田切委員長】 じゃあ、コーヒーの本質を今から議論してみたいと思いますが、それでは審議事項に入ってみたいと思いますが、先ほど専門官からご説明がありましたように、資料1の3ページ目、4ページ目になります。ここに2つのポイントが描かれておりまして、この点を中心に議論をしていただくという、それが今求められております。ちょうど時間として30分前後の時間が残っておりますので、雄谷理事長も含めて、大変恐縮ですが、加わっていただきながら議論を進めていきたいと思いますが、さて、いかがでしょうか。

少し、私から1点だけご指摘というか、議論させていただきたいと思いますが、3ペー

ジ目のほうにプロセスデザインという言葉があると思います。先ほどの雄谷理事長のPCMも含めて、大きくプロセスデザインというものを理解してみたいと思いますが、私はこういうふうを考えております。いろいろな地域における課題解決のための取り組みというのはそれぞれ大変時間がかかるものなんだ。しかし、今までの取り組みは時間をコストと考えてしまう。つまり、時間がかかること自体が問題だという認識があったのは、そうではなく、その時間を投資というふう考えていく。時間がかかればかかるほど、問題解決の広がりや深さが前進していくんだというふう考えていく。つまり、コストを投資というふう読みかえていくためには、どうしても事前のプロセスデザインが必要であって、ここの部分にこそポイントがあるんだという理解をしております。

その意味で、いろいろなプロセスというのがあるんだろう、プロセスは一様ではないだろうし、そして、当然、立ちどまりプロセスなども想定していく必要があるわけなんです。そういうものを事前に理解しながら進めるということによって、時間がかかっても、それ自体が将来の恵みにつながっていくと私自身は理解しております。

さて、時間をとって皆様方に考える時間ができたと思いますが、いかがでしょうか。

じゃあ、藤山委員、若菜委員、その順番で。

【藤山委員】 今日、佛子園の現場を見てすごく感じたのは、3ページの新たな価値観に基づき人と人がつながるところなんです。我々は今まで1対1の取引モデルに全部縛られていて、フィフティ・フィフティで、お互いに損得ないと。人に迷惑かけないということにがちがちに縛られているわけです。今日のをやると、一人一人は単に平等ではなくて、Aの人はBを助けるけれども、BはAを助けるわけではない。でも、Bの人はCの人を助けるとか、それがちゃんとまさにごちゃまぜで、多角形で実は連なっているというところが、実はそのほうがほんとうはすごく大きなことか、そういうモデルまで示していただいたんじゃないかなと。1対1でとにかく損をしないということじゃなくて、2人の間では一方的かもしれないけれども、全体では連なっているような、そういう場のデザイン、それがいろいろな小さな力を見込みながら、全体としては実はみんなが一段上に上がっているような、こういうことがすごく両方の観点を含めて、内発的発展でも、そういう輪が繋がることが、それでらせん的に上がっていくのかなというのを今日、実はすごく感じた次第なんです。そういう理解で合っているかどうかというものはあれですけども。

【小田切委員長】 最後に雄谷理事長からコメントをいただくということで、大変恐縮

ですが、議論を進めていきたいと思います。

若菜委員、いかがでしょうか。

【若菜委員】 これ、4ページも一緒にいいですか。

【小田切委員長】 はい。もちろん。

【若菜委員】 2点、気になっていることがあるんですけども、1つはこの内発的発展という言葉の理解なんですけれども、これは資料の2の1ページ目に小田切先生が描かれた図があって、今回の佛子園さんと前回のNext Commonsさんのお話を聞いてつくづく思ったのが、資料2の1ページ目なんですけれども、将来の存在を肯定で外来型と内発型があるんですけども、外来型の役割というのがどうしても強くなってきているなという。例えば私も地域に入って、どうしてももう地域だけでは無理で、Next Commonsさんとか今日の佛子園さんのように、彼らの価値観を上手に地域が受けとめる、外の思考を上手に中が受けとめるというところの発展論を必要としているエリアがすごく増えているなという気がして、それは内発的発展志向の外部アクターとの連携を強調の④よりは、外来型発展思考は②しかないですけれども、ここにもう一個くっついて、②ダッシュじゃないですけれども、外来型の発展を上手に内側で受けとめるみたいな、そういう新しい内発的発展も位置づけちゃったほうがストレートだなという気がしていて、もう少し内発的発展というのを描いたほうが、今の議論にもしっくりくるかなと、そこがちょっともやもやとしたのが1点目。

あと、3ページも4ページもなんですけれども、今後の方向性のところで行政という言葉が出てきていて、例えば3ページ目の今後の方向性の2つ目のポツで、行政と民間が状況に対応して適切な役割分担ですとか、あと、4ページのほうも今後の方向性の1つ目に、行政による政策デザインが前提として必要だと書いてあるんですけども、今日もそうだし、Next Commonsさんもそうなんですけれども、行政ってどんな役割があったかなという議論はしていないなというか、どうなんだろうという部分があって、今のままでのこの書き方というのは、議論が立ち入ってないな、足りないな、要るのかなというところを、済みません、気になっているところだけの指摘なので、その2点です。

【小田切委員長】 ありがとうございます。

それでは、一通り各委員からご意見をいただきたいと思います。玉沖先生に振っていいですか。それともこちらから、よろしいですか。じゃ、玉沖先生に。あと、この順番で、申しわけございません。

【玉沖委員】 私は2点ありまして、まず、先ほど若菜委員がおっしゃっておられた4ページの行政による政策デザインというところなんですけれども、行政の議論をというお話があったんですけれども、そこは事務局機能という機能があるなと思っていて、行政がそこを担ってくれれば理想だなというのを感じております。それと、政策デザインのところは、何度も申し上げておりますけれども、戦略だったり計画に至る前のこうなりたい、どうなりたいというところの意思を持つというところや意思を問うというところを重視したいと考えております。

それともう一つ、外部アクターのお話なんですけれども、ここの政策デザインとか意思とかが明確にあれば、外部アクターを上手に起用するというのが生まれてくると思うんですね。もしかしたら、そうなる、これはほんとうに思いつきの想像なんですけれども、外部とか内部とかではなくて、アクターと総称できるような事例に持っていけるのではないかなというのを、このたびの佛子園さんの視察をさせていただいて学ばせていただいたところがございます。なので、外部内部という分けなく、一アクターのコーディネーターみたいなところも、少し今後見据えていきたいなと感じました。

以上でございます。

【小田切委員長】 ありがとうございます。

沼尾先生、お願いいたします。

【沼尾委員】 今出たところは私も気になっています。資料2の小田切先生の資料のこの図が非常に気になっていて、まず、内発とか外部とありますが、誰が内発で誰が外部なのかという問題です。先ほどのお話の中でも、例えばサービスを提供する人と、サービスを受ける人とがごちゃ混ぜでミックスされているというときに、内発的發展という場合の内発とは、それは住民主体という話なのか、ファンディングの主体すなわち出資者なのか、それとも地域の資源だとか風土、文化などを大事にしながら、それを育成していくのであれば、それを活用したり、それに関係をつくるのは誰でもいいのか。内発的發展と言っているものと外部と言っているものについて、アクターが誰かという分類以外にもいろいろ考え方があろうと思うので、もう少しここを整理する必要があるのではないかと思います。それが1つです。

それからもう一点、先ほども申しあげましたが、やっぱりこういうプラットフォームをつくるというときに、ガバナンスとマネジメントは非常に大事だと思っています。そのときに、行政が合併したり広域化したりしていて、地域コミュニティとの距離も開いてい

る中で、地域における意志決定を含め、暮らしの場、プラットフォームをつくるというところの意思決定を支える黒子役を誰が担うのか。それを行政が担えればいいのですけれども、難しいとすれば、佛子園さんのような組織が、PCMの手法などを入れながら、地域でガバナンスを取り戻していく仕掛けがつかれるのかもしれない。そこを誰がどうサポートしていくのかという視点が必要だけだと思います。そしてもう一方で、経済成長するかどうかはともかく、経済、ないし資金循環を考えることがとても大事で、それぞれが役割を担いながら衣食住が確保できる関係をつくる。そのときに経済を回すエンジンが、既存の産業構造のもとではなかなか生まれえないのだとすれば、そこに新しい仕組みをつくっていくとことになります。ただ、それが地域のなかだけでは生み出せないとすれば、外からその仕組みを移入していくことを考えることになると思うのです。そこに誰がどうかかわって、どういう仕組みを入れるか。その決定権は誰が持っている、その後のマネジメントを地域でできるようにするための仕掛けとか支援策というものを国として、あるいは自治体としてどう考えていくのか。行政のこれからの役割はそういうところにあり、また期待されるところでもあるのかなと思いつつ、今回の話を聞きました。

感想めいたことですが、以上です。

【小田切委員長】 ありがとうございます。

松永委員、お願いいたします。

【松永委員】 議論のポイント①、②両方にかかわることですけれども、プロセスデザインにしても、内発的発展にしても、枠組みを議論すると同時に、そこで活躍する人というのにもっと焦点を当てる必要があるんじゃないかなと思っています。

これだけ地域づくりというのも今日の雄谷さんのお話のように、社会福祉法人が先導する例もあれば、やはりいろいろな枠組みがある中で、一人一人の移住者も含めた能力開発をどうやっていくかというのが持続性にもかかわってくるんじゃないかなと感じました。

先ほど小田切先生がプロセスデザインはコストと捉えるのではなく投資と。まさに投資というのは人に対する投資だと思うんですね。地域に箱物をつくる投資ではなくて、人に対する投資だと思います。だけれども、PCMにしても、いろいろなマネジメントの手法にしても、あまり地域づくりの中では語られてこなかったと思うんですね。だから、こうした枠組みの議論とセットで、人の能力開発というのを真剣に議論する必要があるんじゃないか。

そのときに、普通の組織、会社と違うのが、キャリアチェンジしていることですね。

だから、今日の佛子園さんのお話でやっぱりおもしろいのは、青年海外協力隊の方がキーになっていると。全く異国でやっていたことをこの輪島で追求されているわけですね。それが多分、地域で何かが起こるときに、これまで全然違う異分野のことをやっていたように見えるけれども、その人の中ではきっと次のステージに結びついていたりするわけですね。だけど、トータル的にその人の能力を開発するようなことはあまりされていなかった。定住対策という入り口の支援はすごくされてきたと思うんですが、今後はむしろ、キャリアチェンジ後の能力開発というのがキーワードになるんじゃないかなと思いました。

【小田切委員長】 谷口先生、お願いいたします。

【谷口委員】 大体大事なことは言われてしまったような感じなんですけど、ポイント①、②とも書かれていることは全くそのとおりだと思うんですが、今日、私が思ったのは、4ページの最初のところに地域資源を活用しながらとあるんですが、僕は高齢者が地域資源だと認識していたんですけども、障害者を地域資源だとは全く認識していませんで、申しわけありませんでしたということなんですね。地域資源の捉え方って、偏見とか思い込みが結構あって、そのところはこういう文章だけではなかなか伝わらないところがあるので、いろいろなものが地域資源になるんだよということと、あと、今日見せていただいたのは、箱物じゃないのかもわからないですけども、一流のいい空間ですね。心地よい空間というのを本気でつくるということとセットじゃないと、地域資源も生きてこないんだということも結構勉強させていただいたのかなと思うので、そういうことも含めて、ポイントにうまくニュアンスが入っていけばいいかなと。

以上でございます。

【小田切委員長】 どうもありがとうございました。一通り議論をいただきました。最終的には田中課長、あるいは局長から、そして雄谷さんから少し最後に感想をいただきたいと思いますが、その前に我々内部の中で議論を少し詰めてみたいと思いますが、いかがでしょうか。相互の主張に対する議論。

どうぞ、お願いいたします。

【藤山委員】 2ページ目の図にあるんですが、1ページ目の図だけではなくて、ほんとうは1ページ目と2ページ目の図が同時に見るとすごくほどこけてくるんだなと。というのは、関係人口というのはまさに外から中へ、その逆もあるんで、つながっていきこうということなんですね。そのブリッジをかけようというのが関係人口そのものなので、そうすると、ここがかなりほんとうは、より現実的な方向でほどこけるというか、むしろソリュー

ションが出てくる、見えてくるような形になるのではないかなという感じがして、生態系もそうですが、中古の案もそうなんです、完全に閉じた循環系ではないわけですから、必ずその中に取り込んでいくと。それがあって初めて中もちゃんとリフレッシュして回っていくと。

今日の佛子園さんの建物のつくり方にしてもそうなっている。その辺にほんとうは、これからのデザインの奥義があるのではないかなという感じがします。

【小田切委員長】 ありがとうございます。ほかに、あるいは補足的なコメントでも構いません。いかがでしょうか。

私から、私もかかわってつくらせていただいた1ページ目、2ページ目に対する議論がありましたので、お話をさせていただきますと、1つは、多分、内と外とは何なのかというのは、そもそも地域とは何なのかという概念のことにつながるんだろうと思います。そうすると、地域というのは、最終的に課題を感じている主体というふうにした場合には、先ほどの藤山先生のご説明にもありましたように、最終的には内と外は境目がなくなっていくと。関係人口が増えているこの図を書いたのも、そんなニュアンスを持っております。そういう意味で、先生方のご指摘はそのとおりでらうと思います。

それから、2番目は、この議論を突き詰めていくと、結局は人材ということにつながるのではないかということもそのとおりでございまして、例えばイギリスの内発的発展論の議論は、いわゆるキャパシティーディベロップメントとかキャパシティービルディングの話につながっております。あるいは日本でも内発系発展論の研究者は、いつの間にか人間発達の議論にアプローチしているような研究者もいて、最終的にはそういうふうにとれんする。その意味で、今回の書きぶりのそこの部分が弱かったと思います。

3番目に、行政の役割、これは例えば強力な中間支援組織の存在などを前提とした場合に、一体行政として何が残るのか、それはほんとうにそのとおりでらうと思います。ただ、沼尾先生がおっしゃったように、やはり財政の主体としての行政というのは最後に残るんでしょうが、このあたりの行政という言葉の使いぶりも改めて確認する必要があるのかなと思っております。

最後に、皆様方のほうから何かご発言がございませうでしょうか。

それでは、雄谷理事長、今まで議論を聞いて、ぜひコメントをいただければと思います。

その後、田中課長、局長という順番で、もしよろしければ。

【雄谷理事長】 地域とはという、僕ら社会福祉法人としての中では定義を持っていま

して、人々が継続性と密着性を持って経験を共有する場所という定義をもっています。住み続けるということと、かかわり方、この2点で、だから、一緒にいても、隣がわからないような地域ではないというふうに。継続性、住み続けるということではできるんですね。ただ、特別養護老人ホームのように、今まで住んでいたところから、いよいよ全く、周りの環境を全部たたき切って、ぼーんとどこかに入っちゃうということに関しては、僕は継続性がカットされると思っているので、そこはあまり望ましくない。これは大きな大きな社福を否定することになるのであれなんですけれども、僕は、入所施設は、おおまかに、うちへ集めて縮小させて、地域の家の中に住むということをずっと支援してきました。そう考えると、どんな状況つながっていくということを考える。

行政の役割というのは、僕はほんとうに全国いろいろなところでやっている、やっぱりいろいろありますね。それは手ごわい、ほんとうに手ごわいです。あるときは、国が頑張ろうまくいってほしいな、そのときの立場によってうまく回転してほしいなというときはあります。県と市町村の関係性もまた難しいですよ。ですから、例えば県の計画地と地方自治体の計画地が違っているような場合にははざまに入ってしまうので、市はうんと言っても県はうんと言わない。県はうんと言っても市は言わないみたいな話があるので、僕は反対に国交省の皆さんに教えていただきたいと思うんですけれども。

ただ、よく勘違いするのは、住民主体と地方自治体は違うという理解はしておいたほうがいいなと。佛子園が強いのは、実を言うと、輪島市は皆さん肩を組んでやってきたんですけれども、場合によっては、住民の側に立ってこれはどうなんだろうということを行う立場にあるということをちょっと勘違いしやすいなというのはありました。だから、地方自治体と一緒に話を進めていくと、いつの間にか浮いちゃうということもあるんですよ。住民の声をあまねく拾い上げていくというふうには考えないほうがいいのかなと。

じゃあ、市の役割って何だろうと考えたときに、今、地方創生もそうですけれども、推進計画を立てる、立てるということは錦の御旗になるので、それはお墨つきをつけるという意味では大切。でも、今度その下には、同じ社福でも、何で佛子園なんだよという話は起こりますから、そのときに公平に、行政があまねく全ての業者に、業者という扱いかもしれませんけれども、団体に対して、表面的な平等観は僕は世の中をよくしないと思っています。きちんと見て、この事業がほんとうに役に立つんだったら、そこは応援すべきです。あまねく、こっちがこう言っているから、いいことも悪いことも全部押しなべてやると全部失敗するので、そこは判断しにくいと思いますよ。そうですよね。そんなもんです

よね。だって、こっちを上げればこっちは下がるんだから、そこを言わなくてはいけない状態になって、輪島市とやったときに、何でかと言ったら、うれしかったのは、副市長が——そこら辺はうまいんですよ、市長と副市長。副市長が全部課長を集めて、「何にもしなかったら終わるんだよ」と言ったんです、振り向いて。「それでもいいのか」って言って、そしたらやっぱりわーっとなって、佛子園さんが入ってきたら、こっちもすったもんだする、こっちもすったもんだするで、各課で、やっぱりぼん、ぼんって、それはちょっと無理ですみたいな話が起るんですけども、一押ししたのはそこでした。

ですから、僕は、それがきちんと市としてやるとなったら、僕らもやっぱりリスクは伴いますので、でも、そこでやっぱりわかったと言ってくれるところじゃないとやれない。それは腰が引けちゃうところとは組めない。これはもうリアリティーのある答えだと。そういう場合でも、また国はさらに難しい立場にあるということになりますよね。いろいろですね。

僕はうれしいなと思うのは、最近、省庁連携とかそういったことがされてきて、ほんとうにおもしろい、どっちかというところのほうは厄介になってきたのかなというふうにもっと勉強してほしいな、もうちょっときちんとしたい。そういう意味では、国の役割って、地方自治体に対するもう少し……、まあ、でも、難しいかもしれない。(笑)

まあまあ、何か済みませんが、そんなところです。

【小田切委員長】 ありがとうございました。

局長は最後にご挨拶いただくようですので、課長に最後に一言。

【田中総合計画課長】

久しぶりにこういう激論をまた聞かせていただいて、また、先生方、雄谷先生をはじめ、今日は非常に勉強になったと。勉強しているだけじゃだめだと言われそうなので、いろいろ私の思ったこともお話しします。1つ、これは小田切先生にもお願いしたいなと思っていましたのは、専門委員会でご議論いただくポイントの1番というところに新たなコミュニティの形成という言葉を使っているんですね。コミュニティという言葉は、土地に足がついたコミュニティという言葉もあるんですけども、雄谷さんのいろいろなネットワーク、それは世界に散らばっている青年海外協力隊の人とかOBの人も、それも多分ここで言っているコミュニティだと思うんで、これ、いい言葉をつくりたいなと思っているんですね。どうしてもコミュニティというと、自治会とか町内会とか、その狭い範囲で捉えられる場合がすごく多くて、ここで言っている新たなコミュニティというのは

ちょっと違って、非常にオープンなものだと思うんですよ。

ただ、一方で、先ほど雄谷さんが地域というものを定義していただいたんですけども、土地の上に乗っかっているものとしての地域というものがやっぱりあって、都市とこういうところでまた違って、例えば批判されると思いますけれども、私なんか住んでいる東京では隣の人の名前を知らない。表札が出ていないので、名前を知らないんですね。私は引っ越してきたときに一応挨拶に回ったんですけども、両隣上下、全部合わせて5分の2ぐらいしか人がいなくて、いまだに顔がわからない人もいたりするということ、そのまま10年過ぎるんですよ、ほんとうに。何もなかったらそれで済んじゃうんですけども、そういう中で、地域って何だと言われて今のような話を聞かされますと、じゃ、私は地域に住んでいないなど。

でも、一方で行政というのは統治の機構でもあるので、必ず境目があるんですね。市町村なら市町村の境があって、国にも国境というのがあります。最終的には国の役割とは何だろうというところが多分、私たちが一番考えなきゃいけないところなんですけど、できるだけ手を離して見守る姿勢が大事なのかなど。僕らが考えているよりも、いろいろな人が現場で考えていることのほうが、失敗のリスクはあるんですけども、ブレイクスルーの可能性はあるんだろうなと思っています。おそらく雄谷先生も福祉のいろいろな仕組みをお使いになられて、例えば財政とかをつくる時も、社会保険があり、あるいは補助金がありというのは、うまく組み合わせることによって、スタートアップのときのお金、あるいはランニングの一部をきちっとマネジメントできるんだろうなというのは何となくわかるんですけども、そういう制度の持続性、あるいは制度が終わるなら終わるといのは国の役割としてしっかりと話をしないといけない。来年この制度は終わりますよというのを今年言うなんていうのはやっぱりよくないですね。だめになるということがわかるのであれば、この10年後までにはだめになりますよと。

私、ここの仕事の前は福島原発地域の復興という仕事をしていたんですけども、例えば、福島の中でも原子力発電所、第二原発は廃炉にしてほしいと言うわけです。だけど、第二原発を廃炉にすると、立地補助金がどんどん減るんですよ。すぐにぶちっと物事が切れるというのはできないんだと。ということでは、ある程度の安定性、持続性を持った制度をやらなきゃいけないし、先行き問題があるのであれば、早目に議論を投げかけていくというのは国の役割なんだろうなとは思いました。

それから、先ほど市町村と県の話とかもいろいろ出ていましたが、行政というのはどう

しても法律に基づいて仕事をしていまして、国の役人になると、法律を自分のところでつくっているのが、現場にあった解釈を行う裁量がある程度あるのですが、県、市町村になると、紙に書いた法律や国がつくった指針をベースに行政はしていますし、議会にもそういうふうに説明しているということから始まりますので、だんだん裁量の余地が狭くなってきているのも事実だと思うんですね。でも、その裁量の余地が狭くなっていることが結果として現場でうまくいかないのであれば、まずは国にどんどん言っていただくべきなんですね。法律を変えられるのはまずは国であり国会なので、国の役割はまずそこかなと思いました。

【雄谷理事長】 国交省のお金で空き家改修とか住宅セーフティで、いろいろな人と一緒に住んでもらうような改修もできるんだよと言ったら、社福の人はほとんど知らないんです。だから、今、輪島に来て、「雄谷さん、これ、どうやってやっているの？ これ、厚労省のお金？」って言うから、「国交省」と言ったら、みんな「え？ 国交省でやれるんですか」と言う。そこら辺はもう少し表に出してもらって、反対にそれは僕らの仕事なのかもしれないけれども、同じ福祉をやっている人間に対して、もっとこういうふうに使ったらというのを入れたらいいのかもしれない。ちょっと話がずれるのかもしれないけれども、住宅セーフティネットの話なんかも、こっちで看板を掲げれば何でもオーケーというふうに。そこまでフレキシビリティを持たせた時代に逆になってきたのかなと思って、だから、僕はびっくりしました。

【小田切委員長】 まさに行政への要望もいただきました。

課長からいただいた宿題の前半ですが、開かれていて、ごちゃまぜで、しかし、地域性がある、こういった集団、組織、それを何と呼ぶのかというのは我々の宿題として受けとめたいと思います。「新しいコミュニティー」という言葉ではないものを打ち出すのもこの分科会の役割だと思います。

それでは、以上で、時間の都合もございまして、11回目の会議を終了したいと思います。ほんとうに熱心な議論を賜りまして、ほんとうにありがとうございました。

それでは、終わりに当たりまして、事務局から連絡事項があれば、お願いいたします。

【水谷課長補佐】 ありがとうございました。

それでは、会議終了に当たりまして、最後に局長の麦島より一言ご挨拶申し上げます。

【麦島国土政策局長】 ご熱心にご議論を賜りまして、どうもありがとうございました。初めての地方開催ということでございましたが、大変有意義な議論ができたと思いますし、

理事長、ほんとうにありがとうございました。今後ともよろしくどうぞお願いいたします。

いずれにしても、住み続けられる委員会ということで、裏返せば、うかうかしていると住み続けることができないところが出てくるという前提だと思って、私は緊張しているんですけども、いずれにしても人口減少というものは受け入れていかないといけない。そういう中で、少ない人数でどうやって空間をマネージしていくかとか、次世代にその空間を引き継いでいくかという中であって、関係人口というか、いろいろな異質なものの交流というか、これは今日も現場を見せていただいて、理事長のところもそうですし、千枚田にもそういうヒントが、修学旅行の話なんかも含めていろいろあろうかと思っておりますので、我々もよく整理をして次回につなげたいと思います。

それで、田中課長からも申し上げましたコミュニティーの話は、ぜひ委員長、引き続きご指導を賜りたいと同時に、コミュニティーに求められる、ある意味では機能というか、何の機能を維持しないといけないのかというところのアドバイスをいただけると、非常に私もありがたいなと思うのと、行政の役割の議論がいろいろあって、私なんかの緊張感は、国の役割も変化をしてきていると思いますが、自治体もある意味で住み続けられるとか人口減少の中で、自治体の機能とか力とか、そういうものも日々刻々変化している前提で議論しないといけないところがあろうかと思っておりますので、いずれにしても、役割分担だと思っておりますので、我々もできないことがあることを正直に申し上げないといけないと思っておりますし、これまで以上にこういうところをもっときちんとやれというところは、がんがん言っていただいた上で、我々自身、考えさせていただくことは考えていかないといけないと思っておりますので、そういう意味で、今後ともいろいろなご指導をいただきたいと思っております。

今日はほんとうにありがとうございました。いつもありがとうございます。今後ともよろしくどうぞお願い申し上げます。

【水谷課長補佐】 ありがとうございました。

次回、12月11日、東京で開催させていただきますので、またよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

— 了 —